

総会報告要旨

第三口蓋化の問題点

中 村 泰 朗

「音節の音調和」の現れである後舌子音 *g*, *k*, *x* の口蓋化は共通スラヴ語における最も重要な音現象の一つであろう。第一および第二口蓋化が音節内で生じた「逆行口蓋化」であるのに対し、第三口蓋化は音節の枠を超えて生じた「進行口蓋化」であり、前二者とは明確に区別される。

第三口蓋化はその条件、結果の現れ方の不規則性、絶対的および相対的時期などをめぐって様々の議論をよんできた。殊に第三口蓋化がどのような条件の下で生じたかは問題解決の核心となっているが、今だに有効なモデルは提出されていない。伝統的解釈の集大成ともいべきものは Shevelov⁽¹⁾ にみることができるが、近年全く別の視点からの新説がだされるようになってきた。⁽²⁾

細部についてはいろいろ異説があるにせよ、伝統的立場からの現在最も有力な解釈はおおよそ次のようなものであろう——第三口蓋化は母音の前に位置する後舌子音が前舌母音 *i*, *i̯*, *e* (また *ir* を含める説もある) に先行された場合に生じた。後舌子音に先行する前舌母音は *i* 系統の音であり(*e* はこの場合 **in* に由来)、後舌子音に子音が続く場合には第三口蓋化は生じなかった。もっとも、後舌子音の後に続く母音のうち、起源的に円唇音である *ū*, *y* (<**ū*) は第三口蓋化を妨げたとする説が最も有力である。С. Б. Бернштейн はこれを真向から否定するが、別の解釈を与えているわ

けではない。第三口蓋化の結果がきわめて不規則に現れていることがこの問題解決の大きな障害となっているが、これに対しては、第三口蓋化は地域によりかなりその作用の程度が異なっていたこと、また第三口蓋化の結果は形態論的、語形成論的等各種の要因に影響されたことなどが指摘されている。三つの口蓋化の相対的時期について言えば、第一口蓋化が第二口蓋化より古い現象であることはすでに定説となっている。第二口蓋化と第三口蓋化の時期的関係は微妙であるが、第二口蓋化の方がやや古いとする説が優勢である。

以上のような伝統的解釈に対し、Lunt⁽³⁾ は、第三口蓋化は後舌子音が高い前舌単母音(つまり長短の *i*) またはその鼻音との結合の後に位置し、さらに低い後舌母音(つまり長短の *a*) の前に位置した場合に生じた、とする(この条件は伝統的解釈に近い。また二重母音 **ei* に続く後舌子音が第三口蓋化を蒙らなかったことはすでに A. Meillet によって指摘されている)。第三口蓋化は *g* と *k* だけに作用し、*x* は第三口蓋化に参加しなかった。彼によれば、第三口蓋化はスラヴ語が後期印欧祖語の一方言ないし初期共通スラヴ語とみなしうる過渡期に生じたものである。スラヴ語における *x* の出現、つまり **s* > *x* の変化はまさにこの時期に関係するものであり、従来第三口蓋化の例とされてきた代名詞 **visī* (> ロシア語 *весь*) の *-s-* は第三口蓋化によ

るものではなく、より後の時代における改新形であるという。結局、第三口蓋化は三つの口蓋化のなかで最も古く、口蓋化の歴史的順序は「第三口蓋化→第一口蓋化→第二口蓋化」ということになる。

このような Lunt の説に対してはすでに、彼の使用した資料がきわめて限定されていることなどいくつかの重要な疑問点が提出されているが、⁽⁴⁾ しかし、Lunt とは異なる条件をたてつつも、口蓋化の歴史的順序については同一の結論をだしている Jacobson⁽⁵⁾ の研究もあり、第三口蓋化の研究は新段階に入ったと言うべきであろう。Lunt の説が直ちに伝統的解釈に取って代るものとは言えないであろうが（何故なら、それは伝統的なスラヴ語音韻史研究の成果の再検討を迫るものだからである）、今後第三口蓋化の研究が新たなレベルで論ぜられる契機となる画期的な説であることは疑いない。

注(1) 口蓋化の相対的時期に関する伝統的

解釈の見直しは R. Channon, *On the Place of the Progressive Palatalization of Slavic*, The Hague and Paris, 1972, から始まるようである。但し、筆者未見。

(2) G. Y. Shevelov, *A Prehistory of Slavic*, Heidelberg, 1964, pp. 338~355

(3) H. G. Lunt, *The Progressive Palatalization of Common Slavic*, Skopje, 1981

(4) Д. Д. Беляев による(3)の書評(ВЯ, № 3, 1984) 参照。

(5) G. Jacobson, *Эвристический подход к третьей палатализации задненебных в славянских языках*, в кн.: *Этимология 1984*, М., 1986. 彼は1973年にはすでに、第三口蓋化が最も古い、との結論に達していたようである。

「存在文」をめぐって

山 崎 紀 美 子

ロシア語の伝統文法では、Нет времени. に類する存在否定文は、無人称文の一種として正式に登録されているが、一方 Есть надежда. など否定を伴わない存在表現については登録先が定まっていない。

このような不自然な状況から脱却すべく、たとえば Шведова は、1970年版のアカデミア文法書において、伝統的名詞文に бытийность の意味を求めて、次の a, b, c をひとつのグループにまとめようとした。

- ② Ночь. Тишина.
- ③ Будет ночь. Была ночь.
- ④ В воздухе гарь. Сыну год.

しかし、Шведова はこのグループを1項文の下位分類に納めていたため、Шмелев 1976, Белошапкова 1977, Золотова 1978 などから反論が出され、1980年版のアカデミア文法書において、Шведова は④を структурная схема から семантическая схема に後退させてしまった。これは、ページ数の多いアカデミア文法書における、ほんの小さなできごとではあるが、ロシア